



西山真実、ステップス初個展である。西山とはステップスで何度も会っているので、意外な感じがする。ギャラリーの吉岡まさみのブログは、膨大な量になっていて遡るのが困難になってきた。「吉岡まさみ」とアーティストの名前を入れてパソコンで検索すれば直ぐにできるのだが、ついつい本を読むようにブログの頁を捲らないと私の場合、気がすまない。会場に貼ってあった個展とグループ展の記録を見直すと、ステップスの名前がない。初なのに、画廊に合う展示であった。作品は人間が創るものなので、人間が経営して形成する空間もまた人間同士でのコミュニケーションで成り立っているのではないかと感じる。アーティストは単に場所の提供を願うのではなく、その空間をどのような人物が経営し、どのような人間が集まるのかを考えなければならない。画廊もまた、単に作品を並べるのではない。アーティストとの信頼関係によって展覧会が成立するのは、当たり前だからこそ忘れてはならない事実だ。

今回、西山は白亜・油・水彩の大作から紙にパステルの小品まで、様々なタイプの作品を展示した。全ての作品に共通するのは、植物のような有機的図像が、正に図像の枠を食み出して、まだ生きている状態のままの如く描かれている点にある。無論、作品自体に力があるのだが、何故そのように感じるのかということ、やはり、展示方法に理由があるのではないかと思う。西山は大型の作品を壁に掛けながら、小品も数多く壁面を埋め尽くし、更に平台を用いてまるで植物図鑑を見せるように作品を展示した。確かに画廊とはショールームであり、作品が売れる為によく見せる工夫を行わなければならない。しかし今回の展示方法は、西山の作品がいま描かれたばかりのような「活きの良さ」を強調したことに成功したのではないだろうか。やはり作品とは生き物である。そして、購入すると自宅や仕事場で何時までも「生きたまま」の状態が存在し、決して腐ることではない。我々が死滅しても、作品は生き続ける。

